

授業科目名(英文名) ／Course Title	特殊講義 国際関係論		
担当教員(所属)／Instructor	伊藤 岳(非常勤講師)		
授業科目区分／Category	専門教育科目 昼間主開講科目		
COC+科目／COC+Course	-	授業種別／Type of class	講義科目
開講学期曜限／Period	2018年度／Academic Year 前期・木曜4限	対象所属／Eligible Faculty	
時間割コード／Registration Code	130030	対象学年／Eligible grade	2、3、4年
ナンバリングコード／Numbering Code		単位数／Credits	2単位
オフィスアワー(自由質問時間) ／Office hours	伊藤 岳(前期：木曜日5限(あるいは個別予約) 後期：木曜日4限(あるいは個別予約))		
リアルタイム/アドバイス／Real-time advice 更新日			
<b>授業のねらいとカリキュラム上の位置付け(一般学習目標)／Course Objective</b>			
<p>本講義では武力紛争の原因を中心に、国際関係論(国際政治学)の理論と実証を巡る知識・思考法を学ぶ。近年の国際関係論では、ゲーム理論・ミクロ経済学と親和性の強い合理的選択論・戦略的アプローチ、特に「戦争の交渉モデル(bargaining model of war)」と呼ばれる理論体系が中心になっている。本講義では、「なぜ武力紛争が生じるのか(なぜ交渉による係争解決に失敗し、武力による解決が選択されるのか)」という中心的な問いと、これに関連する一連の問いに回答するための知見・分析枠組みを、紛争原因への「戦争の交渉モデル」のアプローチを中心に学ぶ。</p> <p>講義では、国際関係論・政治学の基礎知識・歴史的事例にも目配せしながら、Rubinstein型の交渉ゲーム(最後通牒ゲーム)を拡張した簡略なゲーム・モデルを用いて講義を進め、ゲーム理論の基礎知識・概念も習得(あるいは復習)できるよう配慮する。並行して、戦争の交渉モデルを中心とした理論体系に対応する実証研究の知見・論点も学び、国際関係論の理論と実証を体系的に理解する。</p>			
<b>達成目標／Course Goals</b>			
<p>この講義では、国際関係論をめぐる次のような知識・スキルを身につける。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 分析枠組みの習得：合理的選択論・戦略的アプローチ、特に「戦争の交渉モデル」を中心とした国際関係論の枠組みを理解する</li> <li>(2) 分析枠組みの応用：武力紛争および関連する政治現象を、論理的・実証的に説明し、読み解く力を身につける</li> <li>(3) 歴史的事例・学説史の理解：国際関係論で頻出する歴史的事例や、学説史の基礎知識を身につける</li> <li>(4) 実証的知見の理解：国際関係論における既存の実証的知見と最新の論点を把握する</li> <li>(5) 講義では国際・国内社会における武力紛争を中心に学ぶが、以上を通して、より一般的には広く国際関係・政治現象を読み解くための基礎知識と論理的な思考様式を身につける</li> </ol>			
<b>授業計画(授業の形式、スケジュール等)／Class schedule</b>			
<p>講義は三部構成で進める。各部では、教科書(J. Frieden, D. Lake and K. Schultz. 2015. World Politics: Interests, Interactions, and Institutions, 3rd edition. New York: W.W.Norton)に準拠しつつ、適宜他の文献を指定して授業を進める。</p> <p>第一部(歴史、学説史と分析枠組み、第1-5回講義)では、前提知識となる国際関係史および国際関係論の学説史と、教科書の副題である“Interests, Interactions and Institutions”の3つを中心とした国際関係論の分析枠組み、特に「戦争の交渉モデル」の分析枠組みを学ぶ。</p> <p>第二部(国際社会の戦争と平和、第6-10回講義)では、第一部で学んだ分析枠組みを応用し、国際社会における武力紛争の原因と、国内政治・国際制度の役割を学ぶ。具体的には、「なぜ戦争が起こるのか(戦争原因)」、「戦争と各国の国内政治はいかに、なぜ連関するのか(国内政治の役割)」、「国際制度は戦争の蓋然性をいかに、なぜ規定するのか(国際制度の役割)」といった問いに順次回答していく形で、講義を進める。</p> <p>第三部(国内社会の戦争と平和、第11-15回講義)では、第一部・第二部の内容を前提に、国内の武力紛争(内戦)と平和の原因を学ぶ。第二部と同様に、一連の問いに回答する形で講義を進める。具体的には、「ある国家においてなぜ内戦が生じ、他の国では起こらないのか(内戦原因)」、「国際社会・国際制度(介入)は、内戦の蓋然性といかに、なぜ連関するのか(どのような役割を果たせるのか(国際社会・国際制度の役割)」、「国内の武力紛争の原因と国家間の武力紛争の原因は、何が共通し、何が異なるのか(国内紛争と国際紛争の類似性と異質性)」といった問いを中心に、講義を進める。</p>			
<b>授業時間外学習(事前・事後学習)／Independent Study Outside of Class</b>			
<p>事前学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の講義時に指示する、次回講義に関連する教科書・副読本の章を事前に読んでおくこと</li> <li>・教科書に加えて適宜参考文献(副読本および論文)を割り当てるので、余裕をもって読み進めること</li> </ul> <p>事後学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講義内容を踏まえ、教科書指定箇所・参考文献を読み返すこと</li> <li>・講義で扱ったゲーム・モデルについて、自分の手で解き(均衡を求め)、解釈すること</li> </ul> <p>これらの事前・事後学習を行わない場合、講義の理解や課題提出に支障をきたす。第2回以降の講義は、履修者が事前学習・事後学習を行なっていることを前提に進める。正当な理由(たとえばインフルエンザ)がある場合を除き、欠席者の個別フォローアップは行なわない。</p>			
<b>キーワード／Keywords</b>			
国際関係論, 国際政治学, ゲーム理論, 交渉ゲーム, 集合行為問題, 政治学, 戦争の交渉モデル, 戦略的アプローチ, 武力紛争			
<b>履修上の注意／Notices</b>			
<p>特に予備知識や前提科目は設けない。高校レベルの世界史の知識や、学部レベルの政治学の基礎知識およびミクロ経済学やゲーム理論の理解があれば講義で扱う歴史的事例や概念、モデルを理解しやすいが、必須ではない。ただし、英語の教科書(邦訳なし)を用いるため、一定の英語力は求められる。参考文献についても、(下記の副読本に加えて)英語論文を割り当てる。</p> <p>また、上述のように、本講義では合理的選択論・戦略的アプローチ、特に「戦争の交渉モデル」を中心とした国際関係論を扱う。国際関係史や国際関係論の学説史も扱うが、たとえば「現在の北東アジアの安全保障情勢」や「某国の国内情勢や弾道ミサイル発射実験の狙い」といった類の情勢解説・時事解説は(理論枠組みの応用事例として扱う場合を別として)扱わない。こうした現実の情勢・事例が重要なことはいままでもないが、本講義ではあくまで「戦争の交渉モデル」を中心とした国際関係論の分析枠組み・思考法の習得と、関連する実証的知見・論点の理解を目指す。</p>			
<b>教科書・参考書等／Textbooks</b>			
<p>毎回の講義では、教科書に加えて副読本および関連論文からも適宜課題文献(次回講義までに読んでおく章)を割り当てる。</p> <p>教科書</p> <p>？ Frieden, Jeffrey, David. Lake and Kenneth. Schultz. 2015. World Politics: Interests, Interactions, and Institutions, 3rd edition. New York: W.W.Norton. (1st/2nd edition でも可)</p> <p>副読本</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浅古 泰史. 2016. 『政治の数理分析入門』木鐸社.</li> <li>・石黒 肇. 2007. 『入門・国際政治経済の分析：ゲーム理論で解くグローバル世界』勁草書房.</li> <li>・石黒 肇. 2010. 『インセンティブな国際政治学：戦争は合理的に選択される』日本評論社.</li> <li>・河野 勝. 2002. 『制度』東京大学出版会.</li> <li>・Kydd, Andrew H. 2015. International Relations Theory: The Game-Theoretic Approach. Cambridge: Cambridge University Press.</li> <li>・Morrow, James D. 1994. Game Theory for Political Scientists. Princeton, NJ: Princeton University Press (邦訳：2016. 『政治学のためのゲーム理論』石黒肇訳, 勁草書房)</li> <li>・中西 寛・石田 淳・田所 昌幸. 2013. 『国際政治学』有斐閣.</li> <li>・シェリング, トーマス. 2008[1960]. 『紛争の戦略：ゲーム理論のエッセンス』河野勝監訳, 勁草書房.</li> </ul>			
<b>【副読本の続きは備考欄に掲載】</b>			
<b>成績評価の方法／Evaluation</b>			
<p>リアクション・ペーパーおよび最終レポートの出来(授業内容の理解度・到達目標の到達度)を基準に、成績を評価する。リアクション・ペーパーはA4で1-2枚程度/1回を学期中3回(合計60%)、最終レポート(40%)は数千字を予定している。履修人数・学年と理解度によっては、リアクション・ペーパーおよびレポートの相互評価セッションや、ディスカッション・セッションも適宜設け、評価対象とする。</p>			
<b>関連科目／Related course</b>			
ゲーム分析, 政治経済学, ミクロ経済学I, ミクロ経済学II, 計量経済学, 政治学, 国家と市民, Rによる計量分析			
<b>リンク先 URL／URL of syllabus or other information</b>			
<a href="http://ces-project.eco.u-toyama.ac.jp/education/course_2018/international_relations_spring2018/">http://ces-project.eco.u-toyama.ac.jp/education/course_2018/international_relations_spring2018/</a>			
<b>備考／Notes</b>			
<p>【副読本の続き】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鈴木 基史. 2000. 『国際関係』東京大学出版会.</li> <li>・鈴木 基史. 2007. 『平和と安全保障』東京大学出版会.</li> <li>・砂原 庸介・稗田 健志・多湖 淳. 2015. 『政治学の第一歩』有斐閣.</li> <li>・山影 進. 1994. 『対立と共存の国際理論』東京大学出版会.</li> <li>・山影 進. 2012. 『国際関係論講義』東京大学出版会.</li> </ul>			